NEWS 論点

「根底」喪失した世界

コロナ大型寄稿

辺見庸

へんみ・よう　1944年宮城県生まれ。共同通信社で北京特派員、ハノイ支局長などを歴任し、日本新聞協会賞を受賞。「自動起床装置」で芥川賞、「もの食う人びと」で講談社ノンフィクション賞、「眼（め）の海」で高見順賞、「増補版1★9★3★7」で城山三郎賞。他に「赤い橋の下のぬるい水」「青い花」「純粋な幸福」など著書多数。

スペイン北部ビルバオで新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐための消毒作業を行う緊急部隊の隊員ら＝3月23日

新型コロナウイルスの感染が地球上に広がっている。この災禍は人類にとって何を意味するのか。作家で詩人の辺見庸さんに寄稿してもらった。

■　■

マスクとミサイルは論ずる別物である。一方はふつう平たくて柔らかく、毫も悪意を感じさせない、ことさらに造形と言っても疎かな消費財。他方は宙にむかい尖形に屹立する。底意の計り知れない、複雑にして精密な破壊兵器である。両者を並べて論じることはできないかもしれない。たしかに前者で戦争は戦えず、後者でウイルス感染を防ぐことはできない。

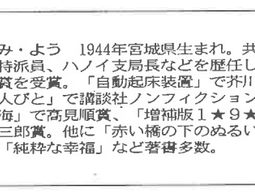
一基のミサイルは一枚のマスクに比べ気が遠くなるほど高価であり、少なからぬ人びとを畏怖させ、悪寒させるほどの神秘性さえそなえてきた。その残虐な破壊性にもかかわらず、いや、だからこそであろう、ミサイルは強力であればあるほど〝ファルス〟のごとき信仰の対象でありえたのである。マスクは防御的で軟弱な表象としていても気楽に使い捨てられてきたのだ。

畢竟は、ミサイルを圧倒的な上位に、マスクを下位のものとみなす価値の順位を、わたしたちは無意識に受けいれてきたのである。言いかえれば、人類は兵器開発には血道を上げてきたが、マスクなど歯牙にもかけてこなかった。果たしてそれでよかったのか？

□空前

新型コロナウイルスによる予期せざる災禍は、これまでまったく疑いもしなかった概念の一切を土台から揺さぶっている。「土台から」と書いたが、しかし、自問を禁じることができない。世界にそもそも「土台」などというものがあっただろうか。

おそらくこの世界はいま、空前絶後の、歴史を画する変容のさなかにある。世界像を世界自身がものすごい力で変えつつあるとも言える。そのダイナミズムに比肩する歴史は、ごくごく短期的にみても、第2次世界大戦の勃発と原爆投下、戦争の終結まで遡らなくてはならないのかもしれない。そのときも「土台」が問題にされた。マルティン・ハイデガー（1889～1976年）の言葉で表せば「根底」である。



マスクとミサイル

「世界にとっては基礎づけるものとしての根底が見出されなくなっている」（「乏しき時代の詩人」）。ハイデガーがいささかならぬ悲嘆とともに述べたのは、大戦後間もない1945年12月であった。ナチスに加担したハイデガーにとって、ドイツの惨憺たる敗北は自らの哲学の挫折でもあり、「神性の輝きが世界史から消えてしまったのである」とまで述懐したのも故なしとしない。

気になるのは「基礎づけるものとしての根底」である。ハイデガーの論述と言葉の数々は、ナチス・ドイツの盛衰ときりはなしても、遠い残響として、歴史の暗がりをうねくりながら今日まで這いわたってきている。が、疑問が黒雲のように湧いては消える。世界を「基礎づけるものとしての根底」は、ひょっとしたら大戦終結当時より、新型コロナ禍のいまのほうがゴソッとなくなってしまっているのではないか。世界の「底」が抜け落ちてしまってはいないだろうか。

□警告

そのような根底なき世界を、哲学者は「世界の夜の時代」と名づけた。同時に「乏しき時代」と呼ぶとともに、それらが「ますます乏しさを加えてゆく」と言いつのったのだった。「世界の夜の時代」が今日のパンデミックを指すものではないにせよ、なにか預言的響きを感ぜざるをえない。やや牽強付会の説をなせば、マスクよりも核ミサイルに〝神性〟をみてきた現代は、ここにきてこの世を存外に乏しき時代とうっすら気づきつつあるのかも知れない。

いや、それは楽観的にすぎるだろう。少なくもトランプ米大統領は現在の「乏しさ」を自覚してはいない。マスク不足に悩み、各州の市民に感染拡大防止のための外出規制を課し、国家非常事態まで宣言している米国は、突如、極超音速滑空体（ミサイル）CーHGBの飛行実験を敢行。マスクよりミサイル重視の姿勢にまったく変わりがないことを鮮明にしているのだから。

にしても、かつていったい誰が予感し反省しえただろうか。核爆弾の過剰とマスクの過少―それらが絶望的に併存する風景を！　象徴的に言えば、新型コロナ禍はそこに生じた断裂の暗がりに音もなくしのびこんできた歴史の警告でもあった。このたびの災厄は深刻な病理としきせっかった疫学上の問題と同時に、テクノロジー万能を信仰してきた世界とそれを支えてきた人類への「壮大な反撃」―という面もあるのではなかろうか。

「第3次大戦」の様相

カフェの窓ごしに長い人の列が見える。隣のスーパーでマスクとトイレットペーパーを買おうという客たちが店の外までみだしている。殺気だってはいない。けれども、マスクをした表情がみな心なしかこわばっている。わたしは急に無花果（イチジク）が食いたくなった。実を枝からもぐと、切り口から乳色の液が滴る。洗わずに食った実の、昔の香臭さを懐かしむ。すっかり変わったなと思う。なにが変わったのだろうか？

□混在

「戒厳令だよな。ひどい不況だしな…」。カフェの客の声が聞こえる。自マスクの声がくぐもる。友人であろう、黒マスクの老人が応じる。「ああ、世界中、まるで戒厳令だな。戦争だとよ…」。トランプ米大統領が「戦時大統領」を名のりはじめ、フランスのマクロン大統領は「これは戦争である」と演説で6回もり返し、ドイツのメルケル首相も「第2次世界大戦以来の挑戦」として、新型コロナウイルスとの徹底交戦を宣言した。たしかに、さながら第3次大戦の様相ではある。

だが、現在のコロナ禍の時代背景には相反する二つの〝顔〟がありそうだ。ブリューゲルの「死の勝利」など中世の絵画を彷彿とさせる古典的災厄の側面と、それらとまったく異なる豪華クルーズ船や最先端軍事システムの、じつに驚愕すべき混在である。スペインはマドリードのプラド美術館にあるブリューゲルの作品には、感染症にうち倒れるおびただしい死者たちや残忍な死刑の光景、遺骸には火山の噴火、荒み果てる都市の姿が叙事詩のように、しかし、万人にとってのデジャビュのようにも描かれている。

それらは中世キリスト教に根ざす「教訓画」とも呼ばれたのだが、残酷にもスペインの新型コロナによる死者は現実にすでに3千人を超えた。もはや詩でも絵画でも映画でもない。マドリードの展示場はいまやコロナ患者用の病院と化している。ペスト禍にあった欧州で昔時、言いならわされた警句「メメント・モリ」（「死を想え」）の声はいま遅ればせながら、時空を超えて全世界にとどろきわたっているようだ。

□戦慄

長く〝誇〟しく思ってきたことがある。歴史の「前進」についてである。歴史はただ進むだけではなく、後戻りしたり反復したりしないものなのだろうか？　かつてミッテラン政権の外交顧問をつとめたことがあるフランスの作家で思想家のレジス・ドゥブレは、歴史には〝逆行〟もありという考えのようだ。1990年代半ばにスイスの社会学者ジャン・ジーグラーと対談したドゥブレは、友人同士の気安さもあってか、めまいがするほど大胆な発言を連発している。

「技術の進歩は不可逆だが、政治は可逆的なものだ。つまり、政治には進歩はないということだ」「人間の作る共同体の奥底には、まったく意識されることのない反復的な構造が潜んでいる」（「屈服しないこと」原章二訳）。これに対しジーグラーは、「目に見える歴史の底に横たわっているあの不可視の歴史こそ、ぼくには決定的に重要なものに思われる」と述べる。抽象的でわかりにくい対話だが、ここには現在のパンデミックともからむ戦慄の終末的イメージがあるように思われてならない。

□痛苦

政治と医療をふくむテクノロジーの分野は、未来にむかって同時的に併走しているようにみえて、そうではない。ドゥブレによれば、政治の世界には「専制主義予防のワクチン」も「人種差別に対するワクチン」も「排外主義に対するワクチン」もないのだという。半世紀以上前に月面着陸をなしとげ、火星をもうかがおうという人類が、ファシズムや人種差別を駆逐する〝ワクチン〟さえいまだにもちあわせていないというのである。新型コロナウイルスの災厄はそのことを痛苦な現実として晒しみせている。

「あらゆる重大なことは、凡て『にも拘わらず（トロツツデム）』起る、といった誰かの言葉を思い出した。ものが亡びる時は、こんなものなのかと思った（『寂しい島』）。こう記したのは中島敦である。（まさか）はない。「累積してゆく不可逆な技術的進歩が、政治における古く変わることのないものと結びつくと、そこにはとんでもない暴発の危険性が生じる…」と、ドゥブレは核戦争の可能性までもちだしたものだ。

息のつまる不安と不信がつづく。わたしはまだマスクを買えていない。無花果を食いたい…それだけが掻るきない事実である。（作家、詩人）

政治の器量

ウェーバー再考

■2■

政治学者の姜尚中さんが、マックス・ウェーバーの「職業としての政治」を基に、政治家と対話するシリーズの第2回は、れいわ新選組代表の山本太郎さん。

山本　私、ウェーバー先生のことを全然知らなくて、こりゃ怒られると思っています。

姜　「職業としての政治」は、第1次世界大戦に負けたドイツが疲弊して、苦境を打破してくれる英雄待望論が国民の間で持ち上がっている時に、若い人たちに「政治はそんな簡単なものじゃないぞ」と教えたものです。山本さんも実感しているでしょうが、政治を志したのはいつですか。

山本　16歳の時から96歳ぐらいまで芸能人として生きてきた私が最初に目が覚めたのは、2011年3月の東京電力福島第1原発事故の時です。当時の枝野幸男官房長官が「直ちに影響はない」と言った。「後々、影響があるってことじゃないか、あー、全員切り捨てられるんだ」と驚き、そして「全員救うって姿勢を持ってもらわなければ困る」と思ったのが始まりです。

姜　それで政治的なことも発言しようと。

山本　そうです。でも、言えない自分に気付く。「スポンサーは神様」の世界だから。我慢していたら、ある日、友達から「メルトダウン！って寝言言ってたぞ」と言われて。もう限界で、ツイッターで「原発はいらない」とつぶやいた。そうしたら仕事が分かりやすく切られていきました。

姜　どう永田町にたどり着いたんですか。

山本　事務所も辞め、「仕事なくなりました」と発信したら、「じゃあ、うちの町に来て話してよ」と市民の方々から頼まれたのです。全国を回り、この国は原発以外にも、とんでもないことであふれていると知る。貧困、差別、過酷な労働…。当事者たちからレクチャーを受けに行ったようなものでした。そして会場に必ず「何とかしてください」という人がいて、これはもう国会に直接言いにいくしかないと。

姜　芸能界を外されて政界へ、というのは珍しいルートですね。登院してどうでしたか。

山本　圧倒的にみんなが私を異物だと感じている空気が漂っていた。

姜　当初、無所属でした。

山本　完全に数が正義で回っている世界で、野党と連携しながら抵抗しても、どこかで線引きする。例えば、3分枠の質問で、30分しゃべり続けると、野党の方が「もうやめよう。選挙で勝つしかないんだよ」と。ごもっとも。でも、選挙で負けて野党なんです。何が何でも食らいついて許さないぞ、という姿勢を示さないで、誰が託してくれるんですか。

姜　敗北主義ですね。ウェーバーは「不可能事を目指して粘り強くアタック」するのが指導者だと言っている。委員会はどこを選んだのですか。

山本　無所属は選べない。余った中から内閣委員会。ただ、10以上の省庁にまたがる委員会で、担当大臣を呼べる。逆に私にはありがたくて、勉強になりました。

姜　ウェーバーは政治家の鍛錬の場は委員会だと説いている。そして官僚制を重視しています。官僚との関係はどうでしたか。

山本　官僚は政策遂行に100パーセント努力するプロ。だからうそまでついて行政府のトップを守ろうとする。完全にこちらをばかにする人もいた。でも心ある人がいて、私の考えで間違っている部分を指摘して、救ってもらったこともあります。

姜　山本さんが首相になったら、官僚とどう付き合いますか。

山本　行政のトップに立てば、官僚には私が考える道を構築、舗装してもらわなければならないが、かなり抵抗もあると思う。それでも心を砕いてくれる人が出てくるでしょう。重要なのが内閣人事局。心ある人がどこにいるのか、探すのに時間がかかる。肝心なのは短命に終わらないことです。

随時掲載します

カン・サンジュン　1950年熊本県生まれ。政治学者。東京大名誉教授、熊本県立劇場館長兼理事長。著書に「マックス・ウェーバー と近代」「悩む力」など。

心ある官僚の登場を　山本氏

やまもと・たろう　1974年兵庫県生まれ。れいわ新選組代表。高校1年生の時のテレビ出演をきっかけに芸能界入り。タレント、映画俳優。ブルーリボン賞助演男優賞。2013年から19年まで参院議員。

国会の委員会で鍛錬　姜氏